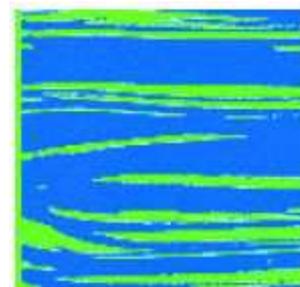


日本行動分析学会ニューズレター

J-ABAニューズ



2017年 春号 No.86 (2017年4月25日発行)

発行 一般社団法人日本行動分析学会 理事長 坂上貴之
〒540-0021 大阪市中央区大手通2-4-1 リファレンス内
FAX: 06-6910-0090 (日本行動分析学会事務局と明記) URL: <http://www.j-aba.jp/>
E-mail: j-aba.office@j-aba.jp

日本行動分析学会第35回年次大会のご挨拶……………鶴巻 正子
自主公開講座報告:「福祉の現場で活かす行動分析学～今、現場で起こっている問題を
行動科学から考える～」……………渡辺 修宏
公開シンポジウム開催記:「公開シンポジウム“衝動性”の諸相」開催記……………八賀 洋介
Rで始める一事例の実験デザイン参加記:「新たな分析への招待」……………遠山矢緒人
連載:いま、こんな研究会しています(10)「多職種連携の勉強会『サックル』の紹介
—勉強会を立ち上げて行動分析学を取り入れるまで—」……………藤原 誉久
自著を語り、近況を語る:『奥田健次の出張カウンセリング 自閉症の家族支援物語』他……奥田 健次
2017年度「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」……………渉外委員会
日本行動分析学会の会員の方へ……………理事長 坂上 貴之
編集後記……………ニューズレター編集部

日本行動分析学会第35回年次大会のご挨拶

鶴巻 正子
(福島大学)

会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。

このたび、《一般社団法人》日本行動分析学会第35回年次大会を福島大学にて開催させていただくことになりました。会期は2017年10月6日(金)・7日(土)・8日(日)の3日間です。場所はJR福島駅西口から徒歩3分に位置しています「コラッセふくしま」です。福島県での本年次大会開催は今回が初めてということで、身の

引きしめる思いで準備を進めております。

10月の福島市は盆地特有の蒸し暑さも収まり、初秋の心地よい季節になっていると思います。会場はJR福島駅に隣接していますので東北新幹線が便利です。福島空港や仙台空港も利用できます。福島県には会津地方や浜通りを中心に観光スポットも多数ありますので、自然や歴史、土地の人情に触れていただくとともに、本学会の皆様にご温かい励ましをいただきました大

震災発生から、まだまだ復興途上ではありますが、6年後の今の様子などもご覧頂けましたら幸いです。本年次大会が、皆様の実りある交流と行動分析学の発展に貢献できるよう精一杯頑張

ります。福島で皆様にお会いできますことを楽しみにしております。

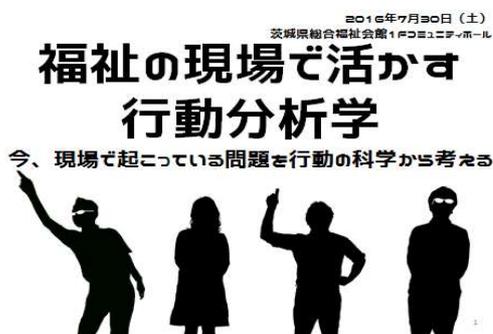
＜自主公開講座：報告＞

「福祉の現場で活かす行動分析学

～今、現場で起こっている問題を行動の科学から考える～

渡辺 修宏

(水戸看護福祉専門学校)



右上：小幡知史会員、左下：佐々木銀河会員、右下：中村道子会員

- 行動分析学の知識と技術は、社会にとって有用である一。
- 多くの実験研究から蓄積された膨大な知見は、人間社会における諸問題の解決に貢献している一。
- 特殊支援教育、リハビリテーション、健康、自己管理、スポーツ、ビジネス、交通、そして福祉など幅広い分野の発展に寄与している一。

行動分析学会員の皆様におかれましては、以上のようなフレーズを一度は耳にされたことがあると思います。その一方、行動分析学が未だに誤解されていることが少なくないことも、ご周知のことと思います。

今回、行動分析学に対するこのような誤解を払拭し、福祉の分野において実際に「ツカエル行動分析学」の普及を目指し、本自主公開講座を企画、実施致しました。遅ればせな

がら報告させていただきます。

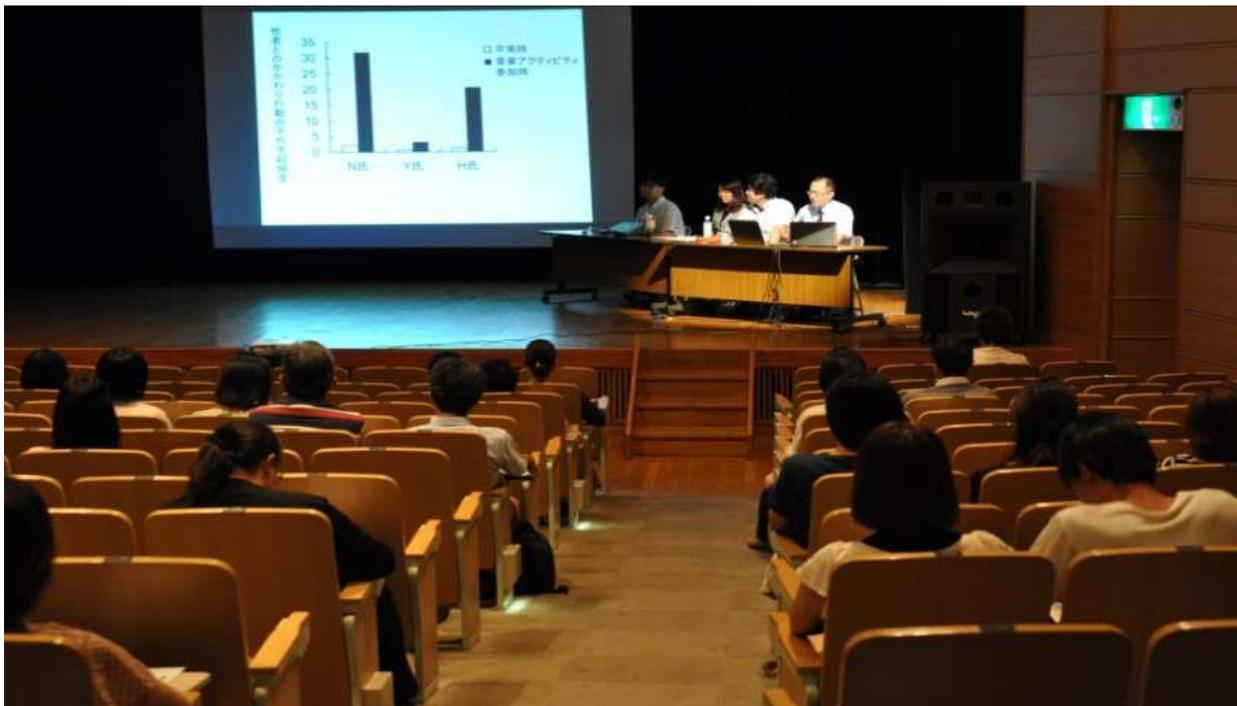
今般の講座は、小幡知史会員（NPO 法人だいち）、佐々木銀河会員（筑波大学）、中村道子会員（東京 YWCA ヒューマンサービスサポートセンター）、そして渡辺（水戸看護福祉専門学校）の4名で企画し、2016（平成28）年7月30日（土）に、茨城県立総合福祉会館で開催させていただきました。

講座の内容は、高齢者福祉施設（渡辺）、障がい児通所支援事業所（小幡会員）、児童養護施設（佐々木会員）、福祉施設職員研修（中村会員）の4つの現場で起こっている様々な問題を取り上げ、それらの事例を行動分析学に基づいて捉え直し、解決へと導く道筋を紹介するというものでした。

講座終了後、質疑応答の時間を設けましたが、具体的な質問は頂けませんでした。58名の参加者のうち48名から得られたアクションシート（回収率83%）からは、46名（96%）が講座内容に肯定的な評価をしてくださり、「行動の後に着目するというのが目からウロコでした」「循環論になるような話をしていたことを反省します」「望ましくない行動を望ましい行動に変えるには、行動分析

の考えは必要だと思いました」といったご意見が寄せられました。その一方、15名の方々から、「内容が難しい」というご指摘も頂戴しました。このことから、行動分析学の理論を福祉実践者に理解していただくことの難しさを感じるとともに、よりわかりやすい講座内容の検討と自由に意見交換するための場づくりが今後の課題であると考えました。

最後に、今般の自主公開講座の開催につきましては、日本行動分析学会より協賛および助成をいただきました。企画段階からは、特定非営利活動法人東京 YWCA ヒューマンサービスサポートセンターさま、障害者就労支援事業所アルカヌエバさま、常磐大学の森山哲美先生から多大なるご協力を賜りました。また、福祉新聞上での講座開催告知（2016年7月11日発行）など、講座の案内につきまして茨城県内外の福祉関係機関から多くのご協力を得ました。さらに、常磐大学大学院博士課程（森山哲美研究室）の中村達大さんには事務局として携わっていただきました。皆様に、心より御礼申し上げます。



会場となった茨城県総合福祉会館 於：茨城県水戸市

<公開シンポジウム開催記>

「公開シンポジウム“衝動性”の諸相」開催記

八賀 洋介
(慶應義塾大学)

去る2016年7月23日に慶應義塾大学で公開シンポジウム「“衝動性”の諸相: Aspects of “Impulsivity”」を開催した。私は坂上貴之先生(慶應義塾大学)と、山口哲生先生(東邦大学)とともに企画を担当するとともに、ICP2016 (The 31st International Congress of Psychology) のために来日した Jose E. Burgos 教授 (University of Guadalajara) と Gregory J. Madden 教授 (Utah State University) とともに話題提供者も務めた。指定討論者には丹野貴行先生(明星大学)にお引き受けを頂いた。Burgos 教授は90年代に Dr. Donahoe や Dr. Palmer とともにセレクトニスト的なアプローチを提唱する著作を共著したことで知られているが、近年はニューラルネットワークをモデルとして学習と条件づけを検討する一方で、行動主義の哲学に関する著作も多く発表している。Madden 教授は意思決定や行動経済学の研究、とりわけ健康と依存症をテーマに衝動性や価値割引研究を第一線で進める研究者として知られており、また2011年から2015年まで JEAB 誌のチーフエディターを務められた方である。

そもそものきっかけは、その前年度の冬に Burgos 教授が私へ連絡をくださったことであった。それまで同教授とは全く面識はなかったが、有難いことに、2014年に JEAB 誌に載せた私の論文をお読みになりご興味をお持ちくださったとのことであり、また、訪日する機会を生かして大学間交流や日本の研究者と交流を持ちたいという主旨であった。つくづく論文な

ど公刊物は名刺になると感じる事例である。個人的な関係作りであれば私の一存でなんとでもなるけれども、オフィシャルな関係についてはポストドク身分の自分では如何ともしようがないので、坂上先生へ相談を申し上げたのであった。その後、同様に ICP2016 のために来日する Madden 教授が山口先生のもとに、類似の主旨の連絡をされたことがわかり、せっかくなのでシンポジウムを開き、懇親しましょうと話が進んでいった。

シンポジウム開催にあたり、数か月前にまず、テーマは決めずに演者に自由に演題および抄録を提出してもらった。結果的には衝動性の語がキーワードとなるのだが、その語からはすぐに得られる少量の強化子と、遅延後に得られる多量の強化子との間で前者を選好する自己制御研究などが連想されやすい。ここでは、そこまで話題を絞らず、時に不合理でも駆り立てられるよう行動をしてしまう様をもって“衝動性”とし、話題提供者3人3様の研究アプローチからあらわれる“衝動性”の諸側面を描き出し認識することを目指し、本シンポジウムのタイトルを上述のように決定した。

私の発表では、強化子呈示の直後に一過性的に次の強化子獲得へ結びつかない非合理的な行動が起きやすくなる現象に対して誘導効果を示した実験データを紹介した。Burgos 教授からは、自動反応形成にみられるパブロフ型随伴性によるキーつつきの生起を説明するニューラルネットワークモデルが提唱され、選択行動場面

のハトの衝動的な行動との比較へと展開された。Madden 教授からは、衝動性と価値割引研究の先端の研究成果として、衝動性の改善にあたり、薬物の（急性・慢性）投与の効果には一貫した結果が得られていないことや、遅延フレーミング（遅延の情報呈示の仕方を工夫すること）が有効であることが実験データに基づき紹介された。討論では、誘導効果が反応全体に占める効果の大きさの問題や、ニューラルネットワークモデルのパラメータ推定や反証可能性の確保の問題、遅延フレーミングとルール支配行動の接続可能性についての議論などが提起された。私の所感を述べさせて頂くと、衝動的行動を環境と行動の関係の点から検討する際に、それをオペラント随伴性以外の制御要因として誘導やパブロフ型随伴性として検討する視点、言い換えると、オペラント制御と非オペラント制御の関係性に関する視点が衝動性の諸相には存在する可能性が多面的に提起され、そして、その性質と制御要因の同定は、衝動性に関する多くの研究が集積してきた価値割引の分野ですらいまだ十分ではないということがシンポジウム全体のメッセージであったように思う。

Burgos 教授にお会いした印象は大変気さくにお話くださる一方、周囲への気づかいのバランスを取る方であった。シンポジウムの前日にも同教授にご来校頂き、研究室見学後に、ささやかな酒宴を設けていろいろなお話を交わした。家族で来日をし、10歳の娘の誕生日だったので、ポケモンセンターへ行って浪費をしたなどのお話が人柄の一端をあらわしている。University of Guadalajara は、同教授のほか、行動主義の哲学的著作を多く執筆してきた Emilio Ribes-Inesta 教授や、基礎研究分野の Carlos F.Aparicio 教授などがおり、メキシコの行動分析学の研究事情はこれまであまり知る機会がなかったが、同大学の研究者の層が厚いことを垣間見る契機となった。

Madden 教授はシンポジウム当日に、ご息ととともにいらっしやり、温厚で真面目な父とい

った印象を受けた。シンポジウム前にスライドの動作確認をする同教授とお話する機会があり、本発表のために計 84 枚にわたる精緻に作りこまれたスライド資料を用意されており大変感銘を受けていますと伝えたとこ、これは大学生、成人向けであり、時には子供向けに説明する機会もあって、その時にはカートゥーンを使うこともあるんだよと、別のファイルのスライドを立ち上げお見せくださり、徹底した準備ぶりにこれまた恐縮した。

衝動性に関わる研究の話題の発展性として Madden 教授の発表内で、肥満、アルコール依存、薬物依存、HIV リスクへの対処などをテーマとした先行研究へ言及された。まさに価値割引研究は翻訳的研究の 1 つの好例となっており、それ自体は大変優れた着眼点であることに疑いの余地はない。ただ、米国と日本では社会的問題は必ずしも一致しているわけではない。研究の発展性として、例えば薬物依存の話題を挙げたとしても、そのインパクトには国の違いによる大きな差があるように感じるのである。社会的なインパクトは、基礎研究の意義に、あるいはその説得力に関わりがあるのだとすれば、日本で基礎研究の競争的資金の獲得を目指す場合などには、このお国柄の違いを看過することはできないようにも思える。少なくとも海外ではこうですよと試みてみたところで言葉が上滑りしてしまうような気がする。日本ローカルの問題は日本の国内研究者が検討しなければならない話題である一方、そのためには心理学という学問の敷居を超えた教養が必要とされる部分もあるのかもしれない。たとえ実践に携わる立場ではない基礎研究者だとしても広く注意を払うべき視点であろうと思うわけである。そんなことをつらつらと考えながら今日もカフェインを摂取した。

なお、本シンポジウム開催にあたり本学会からの助成を受けた。ここに厚く御礼を申し上げます。

<Rで始める一事例の実験デザイン参加記>

新たな分析への招待

遠山 矢緒人
(明星大学)

先日、慶応大学にて「Rで始める一事例の実験デザイン」講座が開催されました。この講座はフリーの統計解析ソフトウェアであるRを用いたシングルケースのデータ分析を学ぶことを目的に行なわれたものです。参加条件としてRの予備知識を必要としないとのことで、私もすぐに講座に申し込みました。

講座当日の2月26日は奇しくも東京マラソンの開催日でもありました。天気も非常によく晴れており、三田キャンパスの周辺は朝から人々の熱気に満ち溢れていたのを覚えております。

講座の中では、まずシングルケースデザイン、ランダムマイゼーション検定、シングルケースの各種効果量に関する基本的な解説が行われました。解説の中では、効果量に対する講師の藤巻峻先生の”効果量を視覚的判断の根拠として使え”という言葉が非常に印象に残っております。視覚的判断の妥当性の問題というのは、特に応用領域においてしばしば生じる問題だと思います。今後シングルケースの分析にあっても効果量のような指標がますます重要になっていくでしょう。しかしシングルケースの効果量に関する英語文献は数あれど、日本語文献は少なく、また日本語で学ぶことのできる機会はほとんどありません。その重要性和対照的に、効果量について気軽に触れることは実際難しいのが現状のように思います。そういった意味でも本講座の内容は非常に貴重なものでありました。

前述の基本的な解説の後、Rstudioを使用した演習が行われました。とはいえ、既に藤巻先

生が作成されたパッケージを使用することで、本来必要な作業のほとんどは自動的に処理することが出来ました。そのためデータの読み込みと簡単な命令の打ち込みをするだけで、反転デザイン、多層ベースラインデザインについてのランダムマイゼーション検定結果および種々の効果量が表示され、さらにはデータのグラフ化まで行われたのです。私はそれまでRを使ったことがありませんでしたが、はじめてのRの使用でここまでの分析やグラフ描画ができるということはそうないと思います。特にグラフはExcelで作成するとかなり面倒であることが多いため、適切な形式のグラフを簡単に（しかも無料のソフトウェアで）表示できることは非常にありがたいことです。この点は検定や効果量を必要としない場合にも変わらない利点でしょう。私にとっては本当に至れり尽くせりといったR初体験となりました。

全体を通して、今回の講座はシングルケースの新しい分析のスタンダードを提供する内容であったと思います。私自身のこれからの学習の重要な基礎ともなりました。また休憩中であっても参加者が積極的に質問している姿がみられ、会場はマラソンランナーに負けぬ静かな熱気に満ちていました。主催者側だけでなく、参加者の高い意欲を示すような行動が多く観察されました。

残念なことは、今回使用したRのパッケージは未完成とのことであり、また現在のところ公表もしていないということです。しかしなんと、今回の講座の内容を含めたRのデータ分析に関

する書籍の出版を予定しているとのことで、その暁には誰でも簡単にシングルケースの検定や効果量を用いたデータ分析が可能になるでしょう。私はその本がこれからのシングルケーススタディにおける必携の書となることを確信して

おります。

最後になりますが、今回このような機会を提供して下さった方々すべてにお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

<連載：いま、こんな研究会しています（10）>

多職種連携の勉強会『サックル』の紹介

—勉強会を立ち上げて行動分析学を取り入れるまで—

藤原 誉久
(上川病院)

筆者は東京都八王子市にある介護療養型医療施設で、理学療法士として勤務しています。病院には様々な職種が働いており、患者の治療、ケアにそれぞれの専門職種の視点が異なります。このため、治療やケアを受ける対象者を中心として、多職種が知識や情報を共有し、同じ目標に向かって協働していかなくてはなりません。しかし、治療やケア方針を決める際に、職種による視点の違いで葛藤が生じ、声の大きい方、社会的地位の高い方になびいてしまうと、結果的に対象者が不利益を被ることになります。

2003年頃より、筆者は数名のリハビリ職種と、医療や福祉の現場で専門職種が持っている知識や情報を、多職種で共有していくにはどうしたらよいかを考え始めました。リハビリ職種は、病気で障害をおった対象者が、少しでも自立した生活を送れるように支援するため、看護師や介護職にその知識を共有してもらうことで、より対象者の自立がさらに図ることができます。リハビリの知識や対象者の情報を上手く伝え、多職種に理解してもらうような勉強会を定期的に行おうと考えました。

こうして立ち上げた会の名称は、多職種連携

を考える会、通称サックル（英文の頭文字をとったのですが思い出せません…）で、仲間内でそれぞれの勤務先の看護師や介護職などに声をかけ、月1回程度、リハビリや看護介護に関する知識の勉強会、症例検討、職種紹介などを行っていきました。しかし、いつの間にか、他職種の悪口、職場の愚痴の言い合いなど、個人攻撃の罠に陥って、建設的な話し合いができなくなっていきました。

そこから、多職種が集まっても、個人攻撃の罠に陥らずに、前向きに話し合えるよう、勉強会の形を色々と試行錯誤していきました。そのうち、多職種がうまくコミュニケーションをとるには、4つの共有が大事であることに思い至りました。「ずれの共有」=職種で考え方が違って当たり前、まずは受け入れること、「知識の共有」=共通の知識についてお互いが学び合うこと、「情報の共有」=学んだことを他者に表現し、相手もその表現に耳を傾けること、「目標の共有」=チームで何をしようとしているか確認し合うこと、です。この4つの共有が体験できるような勉強会ができないかと考えるようになりました。

そうこうしているうちに、筆者は日本大学大学院総合社会情報研究科で眞邊一近先生のゼミに所属し、行動分析学を学ぶ機会を得ました。そこで、職種間のずれは、職種による行動随伴性の違いや、その相互作用によって生じていることに気づき、行動分析学の考え方を多職種で共有し、共通言語とすることで、知識、情報、目標の共有がしやすくなるのではないかと感じました。

そこで、まずは行動分析学を基礎から学ぼうと、2010年に「行動分析学の基礎と医療福祉現場への応用」というテーマで、眞邊先生に講義をして頂きました。翌年には「現場で困っていることを科学的に分析する力をつける」というテーマで半年をかけ、行動の原理の講義と、実際現場で困っている問題の分析の仕方やデータの取り方まで、3回シリーズで勉強会を開催しました。参加者が行動分析学の知識を習得して、現場に応用できるまでを考えていたのですが、専門用語の理解と行動分析学の思考への転換がかなり難しく、参加者の多くから、頭を使いすぎてショートした、なんとなく分ったが現場での応用は難しい、との感想が寄せられました。知識の共通言語化、共有がいかに難しいかを痛感しました。

そこで、行動分析学の専門用語をできる限り分かりやすい言葉で伝える工夫をし始めました。2014年に企画した勉強会では、行動分析学の専門用語をいっさい使わずに、認知症高齢者が介護を拒否する理由の分析と、介入方法を考えることにしました。ただし、行動分析学の道だけは踏み外さないよう、眞邊先生にスーパーバイズをお願いしました。まずは男女間の問題、例えば、デートの約束の日に男性に仕事が入ってしまい、女性に謝ったところ、言い方が悪くて喧嘩が勃発した、などを取り上げてから、実際の事例として、介助者が認知高齢者に排泄介助

をしようとして拒否される場面をあげました。男性と女性、認知症高齢者と介護者の間に起こった問題は、それぞれの立場で行動随伴性が異なり、両者の相互作用で困ったことが起こっていることと、お互いの行動が望ましいものになり、みんなハッピーになるためにはどうすればよいかを、講義とグループワークで考えました。行動を「ふるまい」、先行条件、結果を「前」、「後」と表現し、強化弱化などの言葉も使わずに、ふるまいの前に何があり、その人がふるまった後でどう変わったか、望ましくないふるまいをした時は、前と後どちらにどのような問題があったかを考えました。そして、望ましいふるまいを増やし、お互いハッピーになる具体的な方法とデータの取り方について考えを進めていきました。今までの勉強会の中で、もっとも参加者の理解が進み、男女問題も含めて様々な解決法を挙げることができました。

また、「ケアプラン・アプローチに生かす具体的な行動目標を立てよう」と題した勉強会では、前回の勉強会の形を踏襲しながら、認知症高齢者の問題行動が起こる理由を分析し、望ましいふるまいを増やすための方法、具体的な行動目標をあげて、ケアプラン（利用者の援助計画で介護保険下ではその作成が義務づけられているもの）に落とし込むところまで行いました。行動分析学の考え方をベースにして、多職種で認知症高齢者に関する知識や情報を整理し、目標を確認し合っていくことで、我々の目指している多職種での共有の過程を実感することができました。

現在サクルでは、多職種が集まってコミュニケーションをとる練習の場として、八王子市を拠点に、勉強会を年数回のペースで行っています。今後認知症ケア以外にも行動分析学の考え方をさりげなく取り入れた勉強会を企画していけたらと考えています。

<自著を語り、近況を語る>

奥田 健次 (著)

『奥田健次の出張カウンセリング』

自閉症の家族支援物語』他

奥田 健次

(行動コーチングアカデミー・桜花学園大学大学院客員教授)

1. 自著を語る

(1) 『マンガ 奥田健次の出張カウンセリング 自閉症の家族支援物語』(スペクトラム出版社)

2016年11月にスペクトラム出版社から上記のタイトルの書籍を上梓しました。これは、2014年の『拝啓、アスペルガー先生 マンガ版』の続編であり、マンガ担当も前作と同じ武島波さんです。

前作では、リアリティーを追求して夫婦間の問題も一部で扱うなど、少し「内角を抉りすぎた」ところがあります。それはそれで、今日的な臨床上の課題を浮き彫りにしたという点で、こうした問題を知る専門家の方々からお褒めの言葉をいただきました。そういうわけで、触れにくい社会的問題に前作では触れることができたため、今回はシンプルに子どもの行動で困っておられる両親- 支え合う夫婦- を描くことができました。

たとえば、トイレ恐怖の3歳児(自閉症児)に家庭で取り組んでもらったこと、服薬を激しく嫌がる3歳児(自閉症児)が自ら進んで薬を飲むようにしたこと、「パイナップル」という言葉を聞くとパニックになった小学6年生(自閉症児)に対してこの言葉の苦手を克服したこと、悪夢を怖がり眠れなくなった小学4年生(定型発達)の親にその原因(機能分析による)と

解決法を示したことなど、内容もバラエティーに富みます。

企画サイドの方針により書名に私の名前が冠されていますが、主人公はあくまでそれぞれのご家族という描き方をしてもらおうよう依頼しました。『古畑任三郎』は警部が「主役」ですが、ストーリーにおいては犯人が「主人公」という扱いなのと同じような感じです。『笑ゥせえるすまん』にも通じる図式です。主役ではあるけれども、いつも主役は与えられた役割を果たすだけ。それぞれの背景やエピソード、感情などは主人公である本人と家族のうちに描かれています。

私はこれだけで望み通りだったのですが、種明かしのようなストーリーが欲しいと企画出版側からオーダーが来ました。その結果、私自身の生い立ちが描かれることになったのです。私自身の生い立ちは、過去のドキュメンタリー番組などで語ったこともありますので、ろくなものでないのは分かっていますが語ることに戸惑いはありませんでした。逆に、ドキュメンタリーで取り上げられすぎること戸惑いを感じるので、今回のマンガで描かれて「これでもういいでしょ？」という心境です。

Baer(2005)は、応用行動分析学を「改善すべき行動は何で、どのような順序でどのような方法で改善できるか」という問題を、もっとも一貫

して研究してきた応用科学」としており、「子どもに大きな恩恵をもたらす」としています。この作品を通して、子どものみならず家族全体にもたらした結果がそのような恩恵の一つとなっていれば幸いです。

(2) ケイト・コーエン・ポージー著 (奥田健次 監訳、冬崎友理 訳) 『いじめられっ子の流儀: 知恵を使ったいじめっ子への対処法』(学苑社)

この翻訳書は、2016年9月に出版いたしました。原著は、ABAI大会の書店で私の目に止まった“*How to Handle Bullies, Teasers and Other Meanies: A Book That Takes the Nuisance Out of Name Calling and Other Nonsense*”というタイトルの本です。タイトルは思い切って意識しました。カバーデザインも、とあるいくつかの番組のパロディーといえます。

いじめられっ子が、いじめっ子に対して「知恵」を使って「ひねる技術」を用いることで、いじめっ子を救うこともできるという信念が貫かれています。ちょっと読んでみないとピンと来ないのですが、たくさんの技術の例が紹介されていて、読んでみると「そうか!」となる本でした。

「アクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT)」「マインドフルネス」「ブリーフセラピー」「ゲシュタルト療法」「リ・エバリュエーション・カウンセリング (RC)」「動機づけ面接法」などで用いられる諸技法に通じるところがあるのです。

人気芸人さんの「切り返し」の技術は、どのようなターゲット行動をどのように形成すれば身に付くのか考えさせられました。非常に興味深い本で、いじめに関連する書籍の中では異色の一冊だろうと思います。

2. 近況を語る

長野県に私立幼稚園を設置計画しております

たが、2016年12月によりやく一次認可となりました。それで2017年3月から新園舎の建築工事が始まっております。設立趣意書の通り、この幼稚園は行動分析学を用いてインクルーシブ教育を行うことを掲げています。2018年(平成30年)4月に開園予定となります。

この幼稚園では、園内に外来にも対応できる相談室を設置します。また、放課後を利用して児童発達支援事業所を併設する予定です。長野県で最も小さな定員の幼稚園(3~5歳で計35名定員)で、丁寧な教育支援を行います。行動上の問題については、常にその行動の推移を掲げて最適な解決方法を提供していきます。

幼稚園での教育実習だけでなく、相談室での教育相談実習や臨床実習などの受け入れもできるように準備していきます。応用行動分析学の専門教育や研究のニーズにも応じられるよう整備していくつもりです。実習、就職、共同研究などご検討の方は、ご相談いただければと思います。

幼稚園開園後も、ご支援を賜りますれば幸いです。

引用文献

Baer, D. M.(2005). Letters to a lawyer. In W. L. Heward, T. E. Heron, N. A. Neef, S. M. Peterson, D. M. Sainato, G. Cartledge, R. Gardner III, L. D. Peterson, S. B. Hersh, & J. C. Dardig (Eds.), Focus on behavior analysis in education: Achievements, challenges, and opportunities (pp. 3-30). NJ: Pearson.

2017年度

「日本在住学生会員のABAI/SQAB参加に対する助成事業」

渉外委員会

次世代を担う学生会員日本行動分析学会では、次世代を担う学生会員の国際的な情報交流活動を推進するために、毎年、ABAIやSQABなどの国際学会参加を助成する事業を行っています。

2017年度の第一次募集と選考は終了しましたが、この度、追加募集をすることになりました。

助成対象は、2017年5月25日から29日に米国デンバー（コロラド州）で開催されるABAI第43回年次大会またはSQABおよび、2017年11月14日から15日にフランス、パリで開催される第9回国際会議、Paris ABAIです。

申請するためには、口頭発表、ポスター発表、シンポジウムやパネルディスカッションのスピーカーのいずれかであること、また口頭発表、ポスター発表では第一発表者であることが条件です。その他の条件については学会HPの募集要項をご確認下さい。

応募〆切は2017年7月31日（消印有効）です。学会HPからダウンロードできる申請書に

必要事項を記入し、その他の資料とあわせて、日本行動分析学会事務局まで郵送して下さい。

ABAI年次大会またはSQAB参加への助成申請の場合には、選考されても助成金の振込が大会開催後となってしまいますことをご了承下さい。

<応募先>

〒540-0021 大阪府中央区大手通 2-4-1

リファレンス内

日本行動分析学会事務局

E-mail : j-aba.office@j-aba.jp

学会HP : <http://www.j-aba.jp/>

日本行動分析学会の会員の方へ

理事長 坂上 貴之

これまで、学会のニューズレターは学会ホームページでの掲載という形態を中心として、希望者にだけ紙媒体でもお送りしておりました。しかしながら、学会誌のオープンアクセス化を進めることが決まり、それによってこ

れまで学会に入ってきた著作権使用料が廃止され、また図書館をはじめとする機関購入が少なることが予想される事態となりました。そこで理事会では学会の財政の再検討を行い、まず可能なところからということで、ニュー

ズレターの紙媒体での送付の廃止に踏み切りました。本年度2017年度に皆様にまずお知らせし、2018年度から紙媒体での送付を廃止いたします。今後、現在のインターネットの普及状況を踏まえ、メーリングリストなどの活

用によって、こうしたサービスの低下を最低限にいとめてまいりたいと存じます。皆様には事情をご賢察のうえ、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

新年度を迎え、就職や進学等、環境が大きく変化した方も多いのではないのでしょうか？今年度もニューズレターはこれまで以上に、みなさまの知的好奇心に訴えかけられるような記事を多くお届けする所存です。

さて今号は、自主公開講座の開催記や参加記、研究会の紹介、奥田先生の自著および近況に関する記事と、さまざまな種類の記事を掲載させていただくことができました。記事を

ご寄稿頂きました先生方、突然の依頼にも関わらず、快くお引き受けいただきありがとうございます。この場をお借りし、厚く御礼申し上げます。

今後もこれまでの各種連載記事だけでなく、会員皆さまからの新企画の記事も幅広く掲載させていただきたいと思っております。みなさまからのご寄稿、お待ちしております。

(NK)

J-ABA ニューズ編集部よりお願い

● ニューズレターに掲載する様々な記事を、会員の皆様から募集しています。書評、研究室紹介、施設・組織紹介、用語についての意見、求人情報、イベントや企画の案内、ギャクやジョーク、その他まじめな討論など、行動分析学研究にはもったいなくて載せられない記事を期待します。原稿はテキストファイル形式で電子メールの添付ファイルにて、下記のニューズレター編集部宛にお送りください。掲載の可否については、編集部において決定します。

● ニューズレターに掲載された記事の著作権は、日本行動分析学会に帰属し、日本行動分析学会ウェブサイトで公開します。

● 記事を投稿される場合は、公開を前提に、個人情報等の取扱に、十分ご注意ください。

〒252-0880 神奈川県藤沢市亀井野 1866

日本大学生物資源科学部心理学研究室

日本行動分析学会ニューズレター編集部

眞邊 一近

E-mail: manabe.kazuchika@nihon-u.ac.jp